

井村誠孝

(奈良先端科学技術大学院大学)

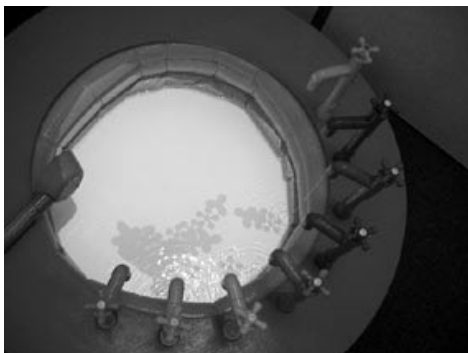
2004年9月8-10日に開催された第9回大会には技術展示・作品展示合わせて23件の出展があった。本稿では筆者にとって特に興味深かった展示について紹介する。

仲谷正史氏(東京大学)らの「コイル形状記憶合金を用いた3次元形状ディスプレイ」は、その名の通り上下方向の駆動に形状記憶合金を用いたピンディスプレイである。3次元(正確には2.5次元であるが)の動的形状提示に際して、高いピン密度と長いストロークの両立に成功している。作者によると映画「X-MEN」に登場するピンディスプレイに感化されて製作を始めたとのことである。フィードバック制御のためのロッド位置測定に使われている色とりどりのマーカの動きにも、一つの作品として捉えられる程の美しさがある。ブースで配られた紹介葉書まで含めて、作者の意識が隅々まで行きわたっていることが感じられた。

参考 URL: <http://www.star.t.u-tokyo.ac.jp/projects/popup/>

田畑慶人氏(京都医療技術短期大学)らによる「手型記号出力機能を有する手袋型入力装置の開発」では、従来の屈曲角測定のみでは困難であった接触判定を行うためのセンサと、手形状を認識するためのDSPを装備した手袋型計測装置を展示していた。性能は十分完成の域に達していたが、試作品であったためか機構面でやや脆弱な印象を受けた。製品として販売する予定もあるとのことなので今後の堅牢化に期待したい。

師井聡子氏(東京電機大学)の「音だま」は、プールの縁に取り付けられた蛇口をひねると水とともに音と映像の塊である「音だま」がプールに流れ込み、柄杓でかきまわすことで音階が奏でられる作品である。音と映像が水の中にたゆたう感覚が絶妙であり、個人的には研究



作品展示「音だま」

室のデスクの横に常備したいと思うほどであった。

参考 URL: <http://www.smlab.ia.dendai.ac.jp/mlab/index.html>

立命館大学から出展された2作品「Cherry Blossom Cyberview -サイバー観桜会-」及び「Vivid Encyclopedia -MR 昆虫図鑑-」はそれぞれ完成度の高いMR空間を確立していた。学生主体で製作されたとのことなので、学会主催の「国際学生対抗VRコンテスト」への応募なども是非検討していただきたい。

参考 URL: <http://www.rm.is.ritsumeai.ac.jp/demo/index.html>

展示会場は3日間を通して総じて盛況であったが、VR技術の主目的があたかも現実であるかのような体験の提供である以上、来場者に「体験」を直接提供することのできる技術展示・作品展示の件数は口頭発表件数に比較してまだまだ少ないと思われる。節目となる来年度の第10回大会においては、主催者が対応に苦慮する程の出展希望がなされることを期待する。

南智規

(京都大学)

私自身にとって初めてのバーチャルリアリティ分野における学会、しかもアルバイトとして参加ということで、学会全体の雰囲気を知るといふ点から見ると少し忙しすぎたかもしれない。

担当はセッション会場であったためにほとんど作品展示などの雰囲気を感じ取ることができなかったのも今思えば残念である。しかしながらセッションの内容はどれも大変興味を引くものであり、アルバイトという立場を忘れて聞き入ってしまいそうになった。

セッションは四つの会場に分かれて行われた。私はそのうちの一つに集中していたためにすべての会場を廻ることができなかったのだが、一つの会場には3Dセッションなるセッションが用意されていて、会場の参加者が全員で立体像を見ながら発表を聞く事ができる仕組みが導入されており、これを用いると聴衆の理解の助けになると同時に、このような仕組みを用いる学会が他にあらうらうかと大変驚いた。またアルバイトの視点から、セッションのある一つの部屋のAV機器の調子があまり芳しくなく(たびたびプロジェクタが表示されないことがあった)、発表者の方々に多大なご迷惑をおかけしたことに大変申し訳なく感じた。

オープンラボの時間においてはアルバイトによる案内